

形容動詞

朝山信彌

形容動詞のうち、カリ活を除く「あきらかなり」（所謂ナリ活）「堂堂たり」（所謂タリ活）の如き一類のものは一方に副詞形「あきららかに」「堂堂と」等への、他方に、「山なり」「忠臣たり」等への各々有力な聯合（更に何か別箇の理由があるかも知れないが）の爲に、少くとも現代の意識では、「あきらかなり」「堂堂・たり」と分析される。その慣用に従つて、「あきらかなり」「堂堂」の部分言語、「なり」「たり」の部分言語と呼ぼう。

形容動詞（カリ活を一應除く）の所謂語幹における單語意識の問題については、示唆多いいくつかの經驗的事實があるのである。

A 文法學說で單語說と非單語說とが現實に並び行はれて居る。現代に限つても、前者は山田孝雄博士の諸著、松下大三郎氏の標準日本文法、安田喜代門氏の國文法論考等があり、後者には吉澤義則博士（國語・國文、昭和七年一月號）、「形容動詞について」、橋本進吉博士（藤岡博士還曆記念論文集）、「國語の形容動詞について」の論文等が屬する。この二說（實は單語說の中にも更に名詞說と副詞說とがある。）の當否に關する窮極の判断——それが理論的に眞に可能であるか否かは更に又別として——は直接本稿の關する所ではないが、ともかくも一應その二說の共に成り立ち得るといふ

現實に、我々は眼をおぼふ事は許されないのである。非單語説を代表する

なるほどこの種の語（靜か、丈夫、堂堂、確乎などを指す——私注）は時としてそれだけで文の成分となる事があり（「あな靜か」「それで大丈夫」など）、又助詞を附して用ゐられる事がある。（「不當の要求」「不用のもの」「堂堂の論」など）。しかしながら、獨立して又は助詞を附して用ゐる事があるのは、副詞にかぎらず、形容詞にもあるのである。（「あな面白」「おぼろの景色や）。しかるにその故に形容詞の語幹を一語と見て「白く」「白し」「白き」「白けれ」等の語尾「く、し、き、けれ」を獨立する語に加はる一種の語と見たものは一人もない。實際に於て、これ等の副詞は「に」「と」を附して用ゐるのが普通であるからそれが附いたもので一語と見るのが妥當であり、稀に「に」「と」のない形が、そのまま又は他の助詞を附けて用ゐられるのは特別の例と見てよいと思ふ。……（橋本博士論文、四頁）

の如きいかにも妥當公正であるけれど、實は「形容詞の語幹を一語と見て……語尾「く、し、き、けれ」を獨立する語に加はる一種の語と見たものは一人もない」に拘らず、「靜か」や「大丈夫」が一部の學者達によつて單語とせられなければならなかつた理由にこそむしろ我々は烈しい好奇心を打消す事が出来ないものである。「あきらか」が何か獨立して意識される機會がなければ、丁度「あきらか」の「あ」や「あき」を單語として扱ふ學説が存在しないと同一理由で「あきらか」を單語と扱ふ學説の存在する理由はなかつたのである。單語説の立場も、亦橋本博士のとは全く別箇な幾分かの眞理を含んで居る様に見える。規範論者達はそれを見のがして居たのであるが、「あきらか」や「堂々」は完全な單語として機能する事はむしろ稀であつても、又幾分かは常に單語としての意識をともなつて居る事こそ普通なのである。

B 現代國語辭書の見出語について、形容動詞語幹のさうした單語意識がうかがはれる。一例をあげれば、

大言海	あきらかに(副)	堂堂(副)	體體と(副)
國語大辭典	あきらか(名・副)	堂堂(副)	體體(副)
廣辭林	あきらか(名・副)	堂堂(名・副)	體體(名・副)
辭苑	あきらか(名)	堂堂(名・副)	體體(名・副)

の如くであり、語幹部がそのまま單語として標出される傾向が強い。唯大言海のみ「に」又は「と」(これは若干の漢語に限られ、しかも「と」を附せざる漢語——「堂堂」など——との區別については何らの標準をも歸納する事が出来ない。)を附して標出して居るのは、凡例卅五(十三頁)に述べる所によつて明らかである。(尙言泉は貌詞——大正元年の「新式辭典」(芳賀博士編)の解説に、「ここに貌詞としたのはサラ／＼、ドン／＼、蕭然、凜然などの模倣、形貌を形容して副詞にも形容詞にも用ゐられる様な語を言つたのである。」と述べられてゐる。——なる暫定的な品詞を設けて、所謂ナリ活・タリ活の語幹をすべて編入して居る)本項に關する限りの世界では、語幹そのままが單語として意識される傾向がむしろ一般であり、間、若干の違例が、その單語意識における個人的動搖を物語つて居ると言へる様である。

C 又形容動詞語幹はしばしば「省略された」形で、語幹形のまま文表現中にあらはれる事がある。「鼓角の音は今靜か」(土井晩翠天地有情)「蘆藉——やさしくおだやか」(筒野氏、字源より)勿論この語形は、日常の會話文や散文の中にあらはれないから、ノーマルな言語意識に根ざす形ではないけれど、一方律文の詩的表現や、漢和辭書の傳統

的な短形の訓釋等では、形容詞語幹にくらべて遙に自在、且活動的に用ゐられる。(この問題と、「はるか」「つれづれ」等のそのまま副詞であるのとを混同してはならない。後者は全く語彙的であり、此處に述べる事とは關係がない。)

D 小學國語讀本の分別書法は、形容動詞語幹と語尾との間に一字分の空白を存して分書して居る。「それ・は・かはいさう・だ。」(八九頁)「花火・だ、きれい・だ。」(六七頁)「しきり・に・止めましたが」(一一七頁)「ズット・キレイ・ニ・見エマス。」(七四頁——以上卷三より)〔原本は・部分一字空白〕形容詞の語幹、語尾については勿論かかる分書はされないものであり、形容動詞の語幹、語尾が形容詞に比し、多かれ少かれ、強力な分離傾向を有する事を反映するものと考へられる。(連體形についてのみは分書しない。これには別に理由があらうと想像せられる。)

E 最後に、エキゾチックだ、ロマンチックなりと、形容動詞の語尾は新しい外來の語基に自由に附加され得る。この事實は、形容動詞の語尾がすでに語幹から分離して(即ち相關的に語幹をも語尾から分離せしめて)積極的な造語能力を有するに至つて居る事を示して居る。形容詞においては、近代語ではかかる現象が活潑でない。

以上の諸事項によれば、形容動詞語幹の單語性について極めて注目すべき示唆が我々に與へられる。即ち形容動詞語幹の單語性は相當に高く、常に單語との中間的な存在として我々の意識の上に去來するといふ事である。

しかも、少くともナリ活——タリ活については資料があまりに少い。——形容動詞語幹のかかる性質は、近代日本語を貫いての根強い形態論的特質であつたに相違ないと考へられる。諸種の國語辭書の見出語、漢和辭書の和訓等を

手がかりとして、その一端を述べてみよう。

まづ近世の雅言集覽、俚言集覽、和訓類林等の國語辭書では、殆ど見出語は「あさやか」「あえか」等と語幹形のままで標出されて居る。稀に「まりりかに」の如く「に」を附加したものであるのは、靈異記、新撰字鏡等の訓註をそのまま引用したものに多いのである。中世末期からの節用集、和玉篇の類の和訓では、やや趣を異にして、語幹のままのもの、「に」を附加するもの、「なり」を附加するもの三種の形式が雜然として混在して居る。しかも數量的に言へば、語幹のままのもの最も多く、「に」を附加するもの最も少いのである。手許の易林本節用集(古典全集本)によつて調査すれば、三種の形式の總數各、46・4・12位で、パーセンテージにして概數各、46・6・20各%の順位となる。(初期の和玉篇について調査した結果は、語幹形のパーセンテージが今少し高い。)

次に、中世初頭に近く、索引の完備した字鏡集について概況を見る。

	あき らか	はる か	しづ か	ゆた か	ひそ か	つまび らか*
I 語幹のままのもの	167	44	34	16	13	32
II 「に」を附加するもの	32	17	20	15	26	13
III 「なり」を附加するもの	102	56	103	52	1 (2?)	20
*「つばひらか」を含む。						

此處では、(一)先づ「に」を附加するものは、一語の場合を除いて、三種の中數量的に最も少い。「ひそか」等は「ひそ

かに」として副詞となる習慣への連想が強かつたのであらうが、他の語では、Iの數量はIIIIIの合計數に對し、何れもやや固定的に一割強——二割強の中間の比率を維持して居るから、この點節用集や倭玉篇に比してIの比率は可成りに増加したと言ふ事が出来る。ついで(二)一見してIIIの比率が著しく増大した。(此處でも「ひそか」における例外はIの場合の理由と相關して考へられる。)字鏡集におけるIIIIIのパーセンテージは概數順序に40・13・47位で、IIIは全數の半ばに近づいたのである。最後に(三)従つてIの比率は半ばに近く減少した。類聚名儀抄、岩崎本字鏡、保延四年の法華單字の和訓などにおける大勢も全く同様であるが、類聚名儀抄・法華單字の如きではIIIの比率が更に幾割か高いのではないかと思はれる。「なり」を附加する形式の院政末における盛行は注目すべく、長寛二年の大般若經普義(石山寺、京大國語國文科教室轉寫本による)では、形容動詞がすべてこの形で註されて居るのである。

ところで以上敘述した所の意味について考へよう。近世・中世を通じ、院政末期すでに(更にその前の時代については後に述べる。)上述三種の單語形式が相交错して共に存在したと言ふ事實からは、當時形容動詞に對する語形意識がすでに三者の間を動搖して居たであらうとたしかに想像する事が出来る。「あきらかに」「あきらかなり」は各々副詞形、終止形における獨立した形容動詞の語形である(和訓における他の用言はすべて活用系列中の最も基本的な終止形によるのが原則である。形容動詞に限つて特に副詞形が終止形と相並んで別箇に意識されて居るのは、實は歴史的な理由があるのである。後述。)が、同時に「あきらか」もそれに伍して、——現代の様に——十分に單語として意識されて居たと考へられるのである。(何故なら單語形式でなければ附訓に用ゐられる筈がない。動詞や形容詞等に語幹で附訓する例は絶対に無いのである。

から。)しかも前述の如く、中世から近代へ、語幹形は漸く増加し、他の形式は遞減する。此處では語幹形における單語感が次第に確定的となるにつれ、その構造の比較的冗漫な他の二種の形式が年と共に廢滅に歸しようとした實情がまざまざと示されてゐるのである。

それでは、所謂語幹形における單語感は何時生じたか。それは更に遙かな古代からの傳統的意識であつたかどうか。平安朝も初期に近く、昌泰の新撰字鏡(天治本による)の和訓はこの問題を解決する秘鑰である様に思はれる。即ち此處では、「會々呂加奈利」「佐也加爾安り」「萬止爾阿利」の三語の他、すべて「阿支良加爾」「阿佐也加爾」「伊與々加爾」「於會呂加爾」「志豆加爾」等と副詞形式によつて附訓されるので、形容動詞の終止形の意識は尙一般に發達の途上にあり、語幹形に對する單語意識はいまだ完成して居なかつたと想像されるのである。

昌泰年間(皇紀一五六〇年前後)から院政時代の中期に至る約二百五十年の歲月は、形容動詞の歴史に取つて誠に記憶すべき時であつた。其處で語源的な副詞と存在動詞との複合から形容動詞が生れ、語幹形における單語意識は「あきらかに」——「あきらかなり」等の對比意識から共通部分が次第に抽象されて生じたものであつたらう。字鏡集について前述した三箇の單語形式は、實はⅠはこの新興の單語形であり、Ⅲは所謂形容動詞、Ⅱは新撰字鏡以前(兼異記や書紀や古い音義類やの訓註も同形式である。)の單語形式を引く、いはば語源的な副詞の段階を示すものであつたのである。

語幹形における單語意識の發生が形容動詞の發達に關聯するとする私の推定を確實に裏書するものがある。形容動詞とならざる他の一類の副詞における狀況がそれであり、「すでに」「まさに」「つひに」「さらに」の如き副詞は形容

動詞となる習慣がない（意味上一般の情態副詞の如く敘述格に立つ機会が少いのである。）が、これらの語幹における單語性は形容動詞におけるより遙かに低いのである。諸辭書の見出語や和訓等において、これらは形容動詞と異なり、各時代を通じて必ず「に」を附加するのが普通であるし、更にたとへば字鏡集によるも、

I	語幹のままのもの	すでに	まさに	つひに	さらに
		2	14	7	26
II	「に」を附加するもの	8	22	28	31

の如く、形容動詞とは正反對に、Iは數量的にIIより遙かに少いのである。これらを以てすれば形容動詞の完成が語幹の分離性に深い關聯を有する事がわかるであらう。

以上はナリ活形容動詞の語幹における單語意識について、歴史的な發展の後を一瞥したのである。しかも、それによれば、少くとも院政期以前に、現代の如く、形容動詞語幹は單語として意識される傾向にあつたらしい。所で、これは主として固有語幹に關する場合である。「孝行なり」の如き漢語を語幹とする形容動詞はそれといかなる關係にあるのであらうか。次にはこの問題について、同様に漢語を語幹とするナリ活と相互に關聯させて考へたい。

ある特定の漢語語幹について、それがナリ活・ナリ活何れの種類に屬するかは、現代では全く慣習によつてしか決定されないと云つて良い。しかし、その兩類に屬する漢語の性質から歸納して考へれば、多少の意味的ニュアンスの

差異がその間に存すべき事は考へられる。これについて、山田孝雄博士は

漢語より借用せる情感語も亦その意義によりて或は「に」を伴ひ、或は「と」を伴ふ。その「に」を伴ふべき性質のものは大體その意味によりして國語の形容詞に譯しうべきものに多しとす。…次にその「と」を伴ふべき性質のものは變聲、疊韻、疊字及然、焉、乎、如、若等を下につけたるものに多しとす。(日本文法論)

と述べ、同書で各、その例語をあげて居られるが、便宜上一語のみの漢語をその中からとると、

優節切便簡賢愚大小美醜妖快粗密幽敏勇——以上「なり」をとる。

殷節眇恍凜赫茫寂寞儼紛察鬱——以上「たり」をとる。

の如きであり、その差異の主として微妙な意味論上の點に存する事が推察されるのである。前者は山田博士の「國語の形容詞に譯しうべきもの」なると共に、又多く國語の抽象名詞であり、後者はすべて支那起原的には擬音・擬容辭に類するもので、然、焉、乎等の助辭が附加され、又重複する事が許される(この事は前者にはない)が、勿論國語で抽象名詞とはならないものである。前者は印歐語で *-ness*、*-heit* 等によつて構成される屬性名詞に相當するが、後者は印歐語で十分これに相當するものがない。

ところで、兩類の語幹におけるこの區別は少くとも起原的なものではなかつた様である。平安時代の文獻では明らかにその趣を異にして居る。例へば、「荒涼」と言ふ語がある。これは現代の習慣では「と」「たり」を取るが、古くは「に」「なり」を取つたらしい。(更に大鏡(右大臣師輔の條)に「この聞かせ給ふ人々荒涼して」とある如き、もはや明らか

に典型的なナリ活語聲におけると同様に名詞として意識されてゐる。

右歌いつこに来つつは見ろぞ。頗荒涼なり。(天徳四年内裡歌合、七番)

又花の中に女郎花のあるに、たはれつと思ひてよめるにや。さらば女郎花ととりわけずして、荒涼なり。(元永二年内大臣家歌合、草花五番)

開かで鳴きとよむらむと推測らむこと頗る荒涼なり。(大治三年永祿奈其房歌合、郭公四番)

意味の重心は心理の方にあるが、勿論現代の「荒涼」と同起原の語である。「けちえん」といふ語もさうである。これが「掲焉」なる事は定説である。

この聲の君はあしき事をもかしがましくいひ、よき事をも掲焉にほむるころざまなれば……(洛窪物語・二)

字源のあげて居る張衡西京賦の「豫章珍館掲焉中峙」等、漢文には、現代の意識では「掲焉として」である。更に「輕輕」「老老」「少少」の如き重複構成(疊語)の語もさうである。「少少」は極めて自然な意識として現代にまで残つて居る。一例づつをあげる。

いかでか御簾の前をばわたり侍らむ。いときやうきやうならむ。(源氏物語・横笛)

もうもうに耳もおほおほしかりければ、ああとかたぶきて居り。(同上・若菜上)

司召にせうせうの可得て侍らむは何とも思ふまじくなむ。(枕草子・七十段)

即ち平安時代の日記物語の語彙の中では、漢語來の形容動詞も多くは固有形容動詞のナリ活に準じて、形成辭「なり」によつて漢語から自由に形成される習慣であつた。(これは現代の「ロマンチックだ」等の形成と同様であるが、又前述

の固有ナリ活形容動詞語幹における單語性の問題と深い關聯を有したのである。固有語幹が全く單語感を有しなかつたと假定すれば、かうした漢語がそれらの語幹の位置に自由に代換され得たとは思はれないのである。これによれば、タリ活形容動詞は彼等の日常の語彙目錄の中には未だ十分に存在しなかつたと考へられる。

枕草子に「陳々として水鋪けり」と朗詠の句を引用して居る(二百六十段)様に、タリ活形容動詞の發生は、早く漢文訓讀における當時の學者語にあつたと言ふ事は確實であり、すでに地藏十輪經元慶點の點圖では、右肩にタリの線點(但し指定の「たり」、完了の「たり」通用)があり、又その語例にもとほしくないのである(しかし春日政治博士(國語科學講座・片假名の研究)によれば、正倉院御藏の阿毗達磨雜集論の點圖には右下にナリの十字點があるが、タリの點はないから、平安初期には、指定助動詞「たり」と共に、タリ活形容動詞は十分には發達して居なかつたであらう。)が、平安末の社會混亂期に際して、それらタリ活形容動詞は次第に公衆の文學語の中に混淆して行つたと考へられるのである。

洗煉された教養階級の日常語(物語・日記等)と特殊階級の學者語(漢文訓讀等)と、それらが互に類廢した姿で入りまざつた渾淆期の間から、形容動詞の語幹たる漢語を上述(九頁)二類の性質に振り分けたのは、實に中世以降の久しい世代の言語意識であつたと考へられる。「なり」は最も自然な日常語の領域において、「たり」は學者語の領域においてそれぞれ長い傳統を有して居た。彼等は、そこで彼等の日常語の文脈コンテクストの中で最も自然である漢語には「なり」を、然らざるものには「たり」を當てた。即ち借用語には「なり」を、外來語には「たり」を振り當てたのである。

山田孝雄博士が「日本文法論」について述べられた所(九頁)は、實にこの事實を結果として指摘されたに他ならな

かつたのである。

タリ活形容動詞の語幹は漢語として獨立的に意識されるが、所詮そのままでは國語の文法體系中に定位されないエトランジエであり、特定の語彙に限り、稀に副詞として意識される事あるのみである。(堂堂・悠悠・蕪然等。尙、タリ活語幹と構造上同類の「當然」「突然」等の副詞は、現代では固有語同様にナリ活である。)

ナリ活形容動詞の語幹は、これに對して名詞の意識が強い。一字の漢語については前(九頁)に例示したが、「忠義」「親切」「濃厚」「清淨」「精密」「冷淡」等二字の漢語についても同一であり、——但し名詞性の強度については一律でない。後のものほど格助詞の取り方は不完全で、不自然でなく接辭「さ」が付き得る。——又歴史的にそれらと相互に代換し得た「あきらか」「しづか」等の固有語も、その限りに於いて名詞的であつたと言ひ得る事は前述した。現存辭書類における品詞名の注記(前記三頁)はその意識の存在を反映するものであり、歴史的な西洋人の著作等においても、例えば *Elements de Grammaire japonaise* のロニイは、「大きな」「きれいな」等をあげて、「ある」が *Substantifs* と *une valeur adjective* を表はすと云ひ、*Historical Japanese grammar* のサンソム氏は、「繋辭的表現を附加して述語をつくる準實詞」と巧みな表現を取つて居る他、日葡辭書・日佛辭書など、多くの字彙類では「あきらか」「しづか」等を名詞と注する事が普通なのである。

事實、起原的に、固有語幹のナリ活形容動詞にも、その語幹が本來名詞であつたものがある。

青丹よし奈良の京は咲く花の匂ふが如く今盛りなり。(萬葉集・大宰少貳小野老朝臣)

これが所謂指定助動詞か、形容動詞の語尾かは現代の語感だけではわからない。

わが盛りいたく降らぬ雲に飛ぶ薬食むともまたをちめやも (萬葉集)

山吹の花の盛りに斯くのごと君を見まは千歳にもがも (萬葉集)

等によれば「盛り」は完全な名詞であつたのであるが、後に恐らく相關的に起つたと思はれる語源意識の消滅と音韻變化との爲に、「さかんなり」は形容動詞となつたのである。(しかして多少の意義變化をした。)

かかる語幹において名詞性の高い形容動詞は、一連の意識の中で、一般にこの「名詞十指定助動詞」の連語と意義的に相關して居る事が多い。

(i) 公徳心の發露は親切だ。

(ii) 彼は非常に親切だ。

二箇の「親切だ」は意味を異にするが、その何れの「親切だ」であるかは個々の文脈の中でしか決定されない。(i)は「名詞十指定助動詞」の連語であり、(ii)は(副詞的修飾語を取つて居る)形容動詞である。意義上から言へば、(i)は印歐語で「(繫辭)十抽象名詞」で、(ii)は「(繫辭)十形容詞」で表はされるものに相當する。しかし、又連語と形容動詞との形式の差異がこの意義上の差異に常に對應するとは限らない。

(i) 肺結核は重症だ。

形容動詞

(ii) 彼は非常な重症だ。

(i) は形容詞的修飾語を取つて居る。従つて「重症」に未だ名詞の意識が保存されて居るが、しかも(i)が *est un malade sérieux* の意味であるに對し、(ii) はむしろ *est sérieusement malade* の意味なのである。これらは連語と形容動詞との分界線上近く位して居る。

更にこの種のもので、より口語的な表現に「兄さんは散歩です」「お父さんは山です」等の類がある。これらは名詞と存在辭とが相互的に制約して、特殊な臨時意義を生ずる例であるが、規範文法で如何に取扱はれて居るかは寡聞にして知らないのである。

此處の問題は日本語の敘述性に關する更に廣い領域に、早晚課題として引出されねばならないものである。

形容動詞には更に中止法の問題が残つて居る。がこれについては、簡単に次の事を一言するに止めよう。

中止法における「に」「と」「して」が副詞語尾であるか、形容動詞の中止形であるかを純粹に客觀的に定める方法はない。それは同時に一にして、他である。起源的には明らかに副詞の意識から生じたのであり、又かの補充法的な觀點に立てば、記述的には形容動詞の語尾系列の中に定位されると言ふ可能性も十分にあるのである。副詞語尾と形容動詞語尾とは此處では異なる二箇の對象を指すのではなく、同一對象に對する二箇の觀點的な差異に基づく名稱にすぎないかも知れないのである。しかも、その何れであるかの記述的な決定は、ひとへに言語意識への慎重な體驗、

もしくは追體驗によつてなされるものでなければならぬ。

今はまだ語るべき多くの問題を殘して、豫定の紙數に達した。

要は、斷片的に形容動詞の主要問題について語らうとしたのであつた。最後に、本稿中に觸れるべくして觸れられなかつた二三の補足を簡條書として本稿を終らう。

I 形容詞語幹に若干の單語性を認めた以上、その語尾は意識上指定の助動詞と一連のものとなるが、助動詞「たり」がやはり學者語から出て、平安時代の假名文獻に表はれなかつた（從來報告されて居る蜻蛉日記の「せうとたる人」は異本に異同があり、古今六帖のは「螢」の隱題である事に注意を要する。）のは形容動詞の語尾の問題に參考となる。

II カリ活については何も觸れなかつた。此處では語幹の獨立性は極めて弱い。中世の歌謠等の「様さまかり」や「興きよかり」等でやや語尾の離れる傾向が見えるに過ぎない。最近京都の子供達が折々「白しろかつた」「面おもて白しろかつた」等言ふのを聞く。

III ねもころ・いささか・わづか・はるか等、ナリ活形容動詞語幹の副詞となるものがある。「いささかに」等が全體で副詞と意識される過程では、それは單に音韻論的な末音省略であるが、「いささかに」の過程では「に」の脱落は形態部の脱落を意味し、機能の示標を失ふ事になる。「いささか」「わづか」等の發生は、古く前者の過程上で行はれたであらう。事實兩語はすでに土佐日記に見える。

——昭和十五年九月一日稿——